
村長無双！

三月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

村長無双！

【Nコード】

N0439S

【作者名】

三月

【あらすじ】

廃村一歩手前の村で村長をしているバド・ホワイト（68歳）は、うだつの上がない怠惰な男である。世襲制でかろうじて村長になったものの、村人から全く頼りにされていない。そんな彼がひよんな事から人の身に余る力を無理やり授けられてしまったから、さあ大変っ！面倒くさい事と厄介事が嫌いな村長は、果たして生き残ることが出来るのだろうか？

この作品は現在では作者の場繋ぎの作品として掲載しています。したがって本格始動するまでは、とんでもない不定期更新きまぐれとなります。

9 / 13

本格始動（という名の試運転開始）ということでは、ランキングに載せました。

プロローグ

王都アルメリアから遙かに離れた山の麓にとある村がある。辺境と云っていいような場所にポツンと存在するその村には、滅多に人が訪れることはない。かつては王都を凌ぐほどの栄華を誇っていた頃もあつたが、今となっては最早見る影すらなくなっていた。村の人口の約60%以上を高齢者が占めるこの村は、それ程遠くない未来に滅びが訪れる事だろう。

そんな辺境の村の村長は、朝の日課となつて^はいる祠の清掃へと出掛けた。村長は世襲制で選ばれており、村長になつた者は必ず代々受け継がれている祠を守らなければなかつた。祠は村長宅の真後ろにある洞窟の中にあり、清掃等の管理・維持は村長の義務なのだ。初代村長であつた”ホワイト”が建てたと言われており、代々村長になる者が受け継いできた祠ではあるが、なぜ管理しなければならぬのかという理由は既に忘れ去られていた。

……いや、完全に忘れ去られた訳ではなく、今でも奇跡的に残つていた記録がある。それは

『村長の任を負いし者、祠を奉り義務を放棄することなかれ』

という一文である。

ご他聞に漏れず、迷信や信仰といった見えない力に対する畏怖・憧憬を持つ村人達は、村長になつた者が必ず祠の管理をするように強要、そして監視をしていた。もしかしたら世襲制という怠惰な制度で暮らしを保証される村長という職業は、皆から恨みを買いやすいのかも知れない。

「はあ………毎朝変わらず肉体労働せねばならんのは嫌じゃのう」
愚痴をこぼしながら村長は通いなれた道を歩いていく。洞窟の中

はヒカリゴケのような淡い緑色に光る植物が茂っており、照明が無くても奥まで歩いていくことが出来る。

今代の村長が幼少の頃に初めてこの祠に来たときは、緑色に光る不気味な洞窟という畏怖の対象でしかなかったが、何十年も通つていればもはや「何とも」思わない。

「さて……………さっさと掃除して帰るかのう」

そう一人ごちて村長が心底面倒臭そうに奥の祭壇の掃除を始める。祭壇の横には湧水が滾々（こんこん）と流れており、飲むことも出来るし祠の掃除にも利用出来る。淡い緑色の光に照らし出されたその風景は何とも幻想的に見えるのだが、何十年も同じ所に通い詰めれば感慨なんぞそれこそ全く起こらない。ただただ村長にとって面倒臭いというだけだ。

とはいえ、祠の清掃作業は全然大したことはやらない。湧水で雑巾を絞りながら黙々と掃除を続け、終わったら礼をして去る……………ただ、それだけだった。そう、いつもであれば……………

「ふい……………まあ、何となく綺麗になったかの。それじゃワシはこの辺で……………んん？」

村長が掃除を終えると、ふと祭壇の奥……………壁なのだが、そこから淡い光が漏れているのを見つけた。

洞窟はヒカリゴケ（？）の影響なのか緑色に発光しているのだが、その奥の部分は白い光を放っている。

不思議に思つた村長は、手で光っている土壁の一部をモソモソと剥がして正体を見極めようとした。すると、土壁からは直径5センチ位の白い球が出てきた。出てきたのは良いのだが、最後の土壁を剥がした瞬間に一緒にポロツと落ちてしまったのだ。

「おりよりよりよりよっ!?……………しまったっ!!」

ガチャン

白い球は地面に叩き付けられると同時に木端微塵に砕けてしまっ
た。

「……………」
村長の背中に冷や汗が伝う。

何十年も通っているとはいえ、こんな曰くつきの祠から出土した
これまた得体の知れないナニカを、あるうことが割ってしまうとは
！！

そう、割ってしまったのだっ！！

「……………」なかつたことにしよう

幸いにも、この祠に出入りするのは基本的に村長以外誰も居なか
った。よって、黙っていればこの事態が明るみになることはない。
事件は闇の中に葬られるのだ。

「ふおっふおっふお、全く問題無いのう」

そういつて村長が踵を返そうとした瞬間

私の封印を解いたのはお前か？

脳みそに直接伝わってくるような不思議な声が聞こえてきた。

村長が顔を真っ青にしながら後ろを振り返ると、頭に蔦のような
冠を被り、見たこともないような白いローブを着た色男が『居た』
のだ……………居たというのは間違っていない。いないのだが、もつと
詳しく説明すると男は『浮いていた』のだ。

「ひええええええええっ！！」

村長はその姿を見ると腰が抜けてしまい、その場から立つことは
おろか動くことが出来なくなってしまった。

お前が封印を解いてくれたようだな……………礼を言うぞ

「へ？」

何とも間抜けな声を出してしまったと我ながら思ったが、村長は
事態がどのようになっているのか呑み込めなかった。

お前が割ったのは封印球という忌々しい球だ。私はホワイトと
かいう男に無理やり封印され、その力を利用され続けていたのだ

(……………ホワイト？なんじゃいきなり？……………そういえば、ワシ

の名前はバド・ホワイトじゃったが………はうあつ!?)

村長の脳裏に嫌な予感がよぎる。

(もしかしてワシの先祖がさっきの球にあの色男を封印したのか?しかも力を利用されたとか言つとつたが一体………そ、そういえば………500年ほど前、この村は王都よりも繁栄していたなんて嘘みたいな記録が残っておつたが、あれは無駄に手の込んだ悪戯文書では無かつたのか?!)

………何にせよどういつた理由でこの色男を捕え、何の目的でどのように利用したのかなんてのは分かりたくもないし知りたくもない。だが話を聞くに村長の血の系列の者がこの封印に関わっていたという確率は、決して低くは無いのだろう。

(いやいやいやっ!これはワシが勝手に推測しているだけにすぎん。かもしれないというの事実ではないからのう。とにかく、ワシは何も関係無いのじゃっ!)

村長がそんな現実逃避をしていると、再び脳みそに直接声が聞こえてきた。

私を封印したホワイトという男はこの祠に私を縛った上で、この地に私の祝福を注ぎ続ける呪いを掛けたのだ。私は必死にその呪いに抗ったが強力な呪いを弾き返すことが出来ず、成す術もなく力が搾取されるしか無かつた。それでも長き時の経過により力の搾取が弱めることに成功したが、完全に封印を解くことは叶わなかつたのだ………もしもお前が封印球を割らなければ、私はずっとこの地に縛られるしかなかつただろうな

「ッ!」

その言葉を聴いた村長の顔面は真っ青になった。

(うばああああああつ!!これってもしかしなくても十中八九、ワシの憶測通りじゃないかあああつ!!)

村長は顔面から更に血の気が引くのを感じた。しかし、それと同時に一縷の希望もそこにはあつた。それは、村長がホワイトの家系だと未だにバレていない事である。バレた瞬間、きつと殺されてし

まうだろう。何せ相手は宙に浮いているのだ。どこの誰だか知らないが、きつとマトモに相手をしてはいけない類の者ではないだろうか。

村長は焦りながらも、その薄くなった頭………もとい、脳みそをフル回転させて現状を把握する。どうやら、自分のことは封印を解いてくれた恩人だと誤解してくれているらしい。このまま押し切れれば、殺されずにこの難局を切り抜けられるかもしれない………いや、切り抜けてみせるっ！

あの忌々しい封印を解いてくれたこと………改めて礼を言う。本当にありがとう………名乗るのが遅くなったが、私はかつて精霊王と呼ばれていた存在だ。私を助けてくれた礼として、私の力の一部を授けよう

「……………え？」

彼はそういうと、村長に向かって淡い光源の塊を放った。「ソレ」は地面で腰を抜かして動けない状態の村長の体にめり込み、そのまま体から出てこなくなった。

「ええっ！！……………ちよっ！？うえっ！？何これっ！？」

わたわたと腕や足やらを動かして焦る村長を尻目に、かつて精霊王と呼ばれた男はニッコリと微笑みながら姿を消してしまった。

「……………これからワシ、一体どうなるんじゃ？」

ポツーンと一人残された村長は、妻が迎えに来るまでずっと腰を抜かしたまま途方にくれるしかなかったのだった。

意気消沈

村長が家に着く頃には、少しだけだが落ち着いて物事を考えられるようになってきた。しかし、考えれば考えるほど分からなくなる。

「さっきのアレは一体なんじゃったんじゃ……………」

思い出せば思い出すほど、非現実的な邂逅だったのでないだろうか。訳の分からない球を割ったと思ったら、そこからいきなり男が出てきてお礼と称した変な物を体に……………体、に……………

「はっ！！そうじゃっ！！ワシの体、どうなったんじゃっ!？」

色々な事があり過ぎて一番大事なことを忘れていた。あの精霊王と名乗った男が放った淡い光源の塊は、村長の体に入り込んだままなのだ。このまま出ていく気配も無い上に、どのような体の変化があるか分からない。

村長は再び体をワタワタ動かしながら体に傷や何かしらの変化が無いかを急いで確認する。目に見えるような変化等が無いことを確認して、さらに顔を青ざめる。

「……………医者に診てもらった方が良いのじゃろうか」

流石に人体のスペシャリストであるお医者様にも分からないだろうとは思うが、心の安寧の為に掛かり付けの医者にも診てもらったことにした。

「至って異常はありません。

強いていうなら、相変わらずリウマチが辛そうですね。面倒くささらず、引き続き処方された薬を飲んで下さい。大体アナタは村長なのですから、子供のわがままのような（以下長いので省略）」

「はあ……………そうですか」

村唯一の小さな診療所で診断を受ける。が、リウマチの薬を渡された以外は特に何もなかった。面倒臭くてあまり行ってなかったの

が仇になったのか、いつもよりもお小言が多い。意気消沈しながら、トボトボと歩いて帰った。

「ワシ……………一体どうなってしまうんじゃ……………」
家に帰るなり、布団の中に入る。

村長が真昼間から布団で寝ていて良いのか？と言われるかもしれないが、頼りにされていない者が何をしようと思われないだろう……………というのが村長の持論だった。

それも実際に……………村長としての責任や仕事をこなしているのは村長の妻である『アンナ・ホワイト』であつたのだ。

有言実行を字で行くそんな村長は、今やいつにも増して”使い物”にならなかつた。

「ちよつと 안타つ！」

真昼間から寝てるんじゃないよつ！」

噂をすればなんとやら。村長の妻であるアンナ・ホワイトがドアをノックもせずスラスカと部屋に侵入してきた。

「なんじゃ騒々しいつ！」

ワシは今、大変なことになつちまつて意気消沈しておるんじゃつ！
そつとしておいてくれつ！」

「何をバカな事を言ってるんだいつ！」

さつさと村の見回りにでも行つてきなつ！」

アンナ・ホワイトはそう言うと、布団を引っぺがして村長をベッドからたたき出した。

「ぐあつ！！」

痛いっ！！腰にきたつ！！！！！！」

「はいはい、それじゃ行つてらっしゃいね」

「うるせーっ！！このクソババアっ！！」

「なんですつてっ！？」

布団から追い出された村長は捨て台詞を吐きながら外へと飛び出して行つた。

力の一部

外に飛び出した村長は、このままどうしたものかと考えていた。家に戻れば、鬼のような形相で怒り心頭のアンナが待っているに違いない。だから、家に帰るといふ選択肢はあるはずもない。

それではどうすればいいのか。

「ふむ………いい天気じゃし、散歩でもするかの」

出不精の村長としては、あんまり気が進まない選択ではあったが背に腹は帰られない。トボトボと何の変哲もない田舎道を歩き始めた。

目的もなくブラブラと歩いていると、いつの間にか村の外にある森の中にまでできていたことに気づく。

あんまり村の外まで行かない村長にとって、こんな所まで来たのはかれこれ半年振りくらいになるだろうか。

「うむ………いつの間にか、こんな所まで来ていたか」

やはり悩みながら歩いていると、時間が経つのが早いらしい。

村長は近くにたまたまあった切り株に腰掛け、頼杖をついた。

「あの精霊王と言ったか………あやつのお陰で胃がキリキリと痛みを訴えてきておるわい」

そして不快ため息を吐いた。

「全く………力の一部だか何だか知らんが、ワシの体に妙な物を埋め込みおってっ！…！もし何かあって死んじやったらどうしてくれるんじやああああああああああああっ！…！」

何を思ったのかいきなり喚き出す村長。近くの木に止まっていた鳥がビツクリして数羽飛び去って行った。

バツサバツサバツサ

アホー アホー アホー

「……………」
鳥の羽ばたく音（それと鳴き声）を聞いて少しだけ冷静になる村長。我ながら何とキチガイじみた行動をしてしまったと反省する。

「うう……………くそう……………なんでワシがこんな目に……………ハズレクジを引くのは村人の誰かで十分じゃないか……………」

もし村人がこの会話を聞いていたとしたら怒り狂うであろう戯言を口から吐き出す村長。無駄に生きている村長は、性根もほどほどに腐っていた。

そしてウダウダと悩みながら切り株に座っていること30分。そろそろ村にでも戻ろうかと村長は立ち上がった。

「それにしても、あの男の言っていた”力の一部”という単語が引っかかるのう。力という位なんじゃから何かしら出来るということなのじゃろうか？」

そう言くと村長は何かを思いついたような顔をする。

「それに自称ではあるが”精霊王”と名乗っているくらいじゃし、魔法か何か出来るようになったのかもしれないのう……………例えば

”ファイアー”

とか言ってみちゃったりしてな……………って、うおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！

戯れに放った適当な言葉が、世界を侵食する”呪文”として発動した。

村長の手のひらから放たれた直系2メートル程の大火球が目目の前の大木を炎上させた。

メラメラメラメラ

「ひょおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！

何ぞこれええええええええええつ！！火事じゃあああああああああああ
あああつ！！どうすりゃ良いんじゃああああああああつ！！」
村長が放った火球が大木に燃え移り、更に隣の大木へと火の手が
迫る。

理解し難い光景に啞然としているが、何もしなければこのままでは森が全焼してしまうだろう。

「うはあああああああああつ！！洒落になつとらんぞこれはああああああつ！！どうするつ！！どうすれば良いんじゃああああああつ！！」

つてそうじゃつ！！火の反対は水じゃから水……………つて、水の魔法つて何があるんじゃあああああつ！！いきなり一般人に水の魔法を今すぐ言えつて言われて考え付くかつてんじゃあああああつ！！
うおおおおおおおつ！！水、水つ！！

”水ウウウウ”つ！！”

村長が意識せず放った言葉は言霊として強化され呪文になり、今度は空中に突如浮かんだ魔法陣から弾丸のようなスピードで大量の水が噴射された。

その大量の水は火が燃え移っている大木を荒れ狂う激流のように飲み込んだ（勢いで粉碎させながら）拳銃、更にそれだけでは勢いが止まらず他の木々も次々となぎ倒していった。

「……………」
思わず無言になる村長。 ”火” だろうが ”水” だろうが村長の言葉を借りるのであれば ”洒落” になっていない。魔法陣が消えて暫くすると、村長は誰にとも無くポツリと一言呟いた。

「……………ワシ、これから一体どうしたらええんじゃ……………」
目の前の大惨事を尻目にどうでもいい突っ込みをほざきながら、村長はその場に立ち尽くす他は無かった。

ジョアンの宿

半ば逃げるように村へと戻った村長は、自分が招いてしまった大惨事のせいで気が気でなかった。もちろん、あの環境破壊跡地を見られたからといって村長の仕業などと思う輩は一人として居ないであろうことは予想できる。

しかしそういった問題ではなく、自分が引き起こしたという負い目が村長を不安と罪悪感で一杯にさせていたのだ。

「ああ……不安じゃ……黙っていれば分からないというのは判っておるが何かこう……得体の知れない不安というか重圧を感じる……ああっ!!もうっ!!居ても立ってもいられんし、背中がムズムズするわいっ!!」

耐え切れなくなった村長は家に帰るといふ選択肢を捨て、村唯一の酒場であるジョアンの宿へと入っていった。

宿という名前の通り実際には一夜の宿を提供する場所でもあるのだが、こんな辺鄙な村に泊まりにくる旅人は稀の稀の稀であったため、宿とは名ばかりの酒場と化している。

しかし娯楽が少ない村にとって酒とは何よりも変えがたい”嗜好品”であり”娯楽品”であるので、宿が回っていなくても酒場が回っていれば宿の主は生活に苦労はしないのである。

「ちよいと邪魔するのう」

村長が扉を開くとカウベルがカランカランと五月蠅い音を立てながら辺りに騒音を撒き散らす。

「ん?誰かと思ったら村長の爺か」。

出不精が出歩くなんで、今日は雨でも降るかも知れんな」

そう言っ出て迎えたのは、宿の主であるジョアンだった。

「そういうお主も立派な爺ではないか。開口一番に失礼な爺じゃのまったく……それよりも、何でも良いから強い酒を今すぐにくれ」

ジョアンの一言をバツサリ切り返した村長は溜息をついて目の前

のカウンターに腰掛ける。

「おいおい、こんな真昼間から強い酒なんぞ飲むなんてどこのごく潰しだよ。」

それに、強い酒なんぞ飲んだらポツクリ逝っちまうんじゃないかねえか？」

そういつてゲラゲラと目の前の爺ジョアンは笑った。

「余計なお世話じゃっ!!」

もう少し客を敬えクソ爺っ!!どうでもいいから、早く酒を寄越すんじゃっ!!」

「ああ、はいはい分かりましたよ。」

それじゃこれでも飲んでくださいな〜っ」と

村長の罵声を軽くあしらいながら、ジョアンはその辺にあった適当な酒をコップに並々と注いで村長に渡す。

芳醇なモルトの香りがプーンと辺りに漂った。

「おお、これを選ぶとはやはり伊達に歳をくつておらんようじゃの。やはり酒といつたらウイスキーに限る！」

そういつて村長は”ウイスキー”の”ストレート”を一気に煽った。

「ぶほおっ!!」

煽った瞬間に目の前の爺ジョアンの顔面目掛けて毒霧（プロレスの技）を吐く村長。それを喰らったジョアンは溜まらず騒ぎ出した。

「ぐおおっ!!」

キタネエなこのクソ爺いっ!!ふざけるのも大概にしやがれっ!!」

「ぐほっ!!ごほっ!!ごほっ!!……ぐはっ!!……うぐっ!!……」

……ふう。いささかビックリしたのう……久しぶりに飲んだが、こんなに度数がキツかったとは……というか、引っ掛け一杯目でウイスキーをストレートなんぞで寄越すなっ!!このボケ爺がっ!!

「!!」

「テメーが強い酒寄越せつつたんだろーがっ！！耄碌しすぎて自分で言った言葉も覚えてねーのかっ！！ああん？」

「だからと言って、物には限度つてもものがあるに決まっとろーがっ！！」

さっさと水で薄めるんじゃっ！！」

方や顔面ウイスキーまみれの爺が一人、方や顔面が蒼白な爺が一人………誰も得しない奇妙な組み合わせが誕生したのであった。

精霊の祝福

「で？真昼間から強い酒なんぞ飲みたいだなんて言うからには何かあつたんだろ？」

顔面ウィスキーまみれの爺が、顔面蒼白な爺に向かつてのたまう。世の中には色々なフェイズムがあると聞くが、これは流石に需要は望めそうにない光景だ。

「どうでも良いが、さつさと顔を拭いたらどうなんじゃ？見苦しいつたらありやしない」

「テメーのせいだろうがっ！！言われなくたって拭くっつーのっ！キタネーな、まったくよーっ！！」

ジョアンはカウンターの置くからタオルを取り出すと水で濡らしてゴシゴシと顔を拭き始めた。村長を目の前にして、それはもう失礼なくらいにゴシゴシと顔を拭っている。

「んでだ。そんなことより、何か悩みでもあるんだろ？言ってみるよ。ほれほれ」

顔を拭き終わったジョアンはムカつく顔で村長を挑発する。

「五月蠅いっ！客のプライバシーに侵入してくるなこのボケ爺がっ！！それよりもさつさとウィスキーを水で薄めんかいっ！」

ジョアンの前にコップを差し出しながら喚き散らす村長。それを仏頂面で受け取って適当に水をぶちまけたジョアンは村長に向かってコップを突っ返した。

「確かにテメーの言葉にも一理あるな。

美人の悩みだったら幾らでも喜んで何時でも聞いてやるけど、好き好んで爺相手に悩みなんぞ聞いても面白くもなんともねえ」

そう言つてゲラゲラと品の無い声で笑うジョアン。ソレを見て更に村長は怒りを増長させた。

「うるさいわいっ！！」

まったくっ！！クソ爺の面なんぞ拝みながら飲んでも不味くなるわ

っ！！ワシは一人で飲んでおるから構うんじゃないぞっ！！」

村長はコップを片手にカウンター席を離れ、ジョアンから丁度死角になる一番離れたテーブル席へと移動した。

カランカラン

村長が席に着いた瞬間、相変わらず五月蠅い音を立てながらカウベルが鳴った。入り口を見やると、屈強な男がカウンターに居るジョアンの元へと歩いていくのが見えた。

「よお、オヤジ。引つ掛けにテキーラー一杯くれよ」

「カイよ……………テメーのオヤジになつた覚えはねえんだが、テキーラなら丁度仕入れたばかりだしすぐに出してやるよ……………っと、これだ。ほれ、持ってけ」

「おう、サンキューな」

カイと呼ばれた男はニヤリと笑ってコップを受け取ると、今度は村長が座っているテーブル席にわざわざ移動してきて座った。

「おいおい、村長ともあろうお方が真昼間から酒飲みかい？良いご身分だねえ」

「そのクソ爺といい、お主といい、同じことばかりぬかしおつて……………色々と考えたいことがあるんじゃないっ！！放っておいてくれっ！！」

男の嫌味にたまらず反撃しつつも村長は逃げの姿勢を崩さない。

「考えたいことつて、どうせくだらねえ事なんだろう？アンタん所の婆さんとケンカしたとか、ぎっくり腰が治らないだとかその程度だろ」

カイは半眼で村長を見る。

「ぐっ……………当たってるカモ……………じゃなくてっ！！
色々は色々なんじゃっ！！放っておけっ！！」

怒鳴り散らす村長をドウドウとまるで牛を相手にしているかのようにならぬがカイは言葉を続ける。

「じゃあ、それ以外に何かあったんか？

荒事だったら、ある程度なら助けてやれるぞ」

そう言つて男は自慢の筋肉塗れの腕で力コブを作る。

このカイという男は身長185cm。体重85kgのかなりガタイの良い男で、人相は一言で言えば悪人面。持ち前のファッションセンスも相まつて、泣く子も更に泣くゴロツキのような男だ。しかし、見た目に反して面倒見が良い兄貴分のような存在で（昔は冒険者のパーティーのリーダーをしていたそうな）、この村唯一の猟師にして若い世代（と言つても38歳なのだが）の人間なのである。

「荒事か……」

村長はホドホドに酔いが回つてきた頭で考える。

よく分らない力とやらを無理やり押し付けられた今、この力をどうすれば良いのか途方にくれている。一言でいえば持て余している状態だ。あまり荒事に詳しくはない村長であつたが、それでも無駄に長く生きてきたことも相まつて、その力は”厄介事”以外の何物でもないと理解していた。コップに延々と水を注げば何時かは零れてしまうように、身の丈にあつた”容量”というものが人にはあると村長は思っている。ぶっちゃけ、こんな力はいらぬのだ。しかし零れるだけならまだ良い。

この力は、零れるどころかコップ（村長自身）を破裂させてしまう危険性が限りなく高いように思える。身のうちに爆弾を抱えていると思つと夜も眠れないだろう。

「……………例えばの話なんじゃが、冒険者の中で”精霊の祝福”を受けた者がたまに居るじゃろ？」

「ああ？”精霊の祝福”？」

それを受けた奴に幸運が訪れるだとか魔力を授かるとかいうアレか？
確かにたまにそんな幸運な奴が居たりするんだが……………おいおい、まさかつ！

爺さん、その歳で祝福されたとか言い出すんじゃないだろうなっ！
そう言つていきなりガタつと席を立つ目の前の見た目チンピラA。

このチンピラAが驚く精霊の祝福というのは、普段目にする事が出来ない万物に宿るといわれる精霊が気に入った人間に対し力を授けることを一般的には指している。精霊に気に入られなければ一生得ることが出来ないような素晴らしい能力を授かるのが通常なのであり、そういった力を求める者たちにとっては天からの贈り物だとか宝クジなどと揶揄されることもある。

そういつたこともあつてのカイの反応だったのだが、それに面食らつた村長は渋々と言葉を続けた。

「例えばの話だと言つておろうがっ！別にちよつとした考え事の一つじゃっ！！そう深い意味で捉えるでないわ。

……まあ、話を元に戻すが、精霊の祝福を受けた者は総じて何かしらの力を授かる者が多いと聞く。

ということはじゃ。そういつた人の身に余るような力を手に入れてしまった者達は普段どういつた生活を送つておるのかな、な、な、なんて思つたりしたんじゃよ。お主、冒険者なんぞやつておつたのだから知つておるじゃないのか？」

村長はそう締めくくると最後の一杯だとばかりにコップに入つた琥珀色の液体を口に含む。水で薄めているとはいえ、老体には厳しい一杯だつたようでもう顔がユデダコのように真っ赤になつていた。「爺さんが何でそんなことを知りたがるのか知らないが、確かに俺の知り合いにも何人かは精霊の祝福を受けた者が居る。俺が知つてる中では4人程その祝福とやらを受けた者が居るんだが、そのうちの3人は”死体になつちまつたよ”」

「ぶほおおっ！！！！」

「ぐおあっ！！！！！！」

カイの衝撃的な言葉に不意打ちを喰らつた村長は、カイの顔面目掛けてウイスキーの毒霧を口から吐き出した。

冒険者として鍛えられた感覚を持つてしても村長の不意打ちで放たれた毒霧に瞬時に対応することが出来ず、哀れ、カイはジョアンを同じ道を辿つた。

力の制御

「ぐあああああつ！！！！目にっ！！
目に入ったあああああああつ！！！」

「ごほおほおほおつ！！！！ぐほつ！！！！ごほつ！！！！ぐぶつ！！！！ぐ
ほおほおつ！！！」

「てめーらっ！！ちったあ静かにしやがれやっ！！！」

上からカイ・村長・ジョアンである。

ジョアンは村長らを一喝した後、もう用は無いとばかりに酒の仕
込みへと戻っていった。

「目があゝっ！！！！目があゝっ！！！！」

「ぐぶつ……………ごぶつ……………ごほおつ……………」

目を抑えるカイに苦しそうに咳き込む村長。傍から見ても需要が
ありそうな光景には見えないだろう。

カイは手探り状態でおしほりを取ると目をこれでもかというくら
い擦る。対して村長は未だに苦しそうに咳き込んでいた。

閑話休題

「……………んでだ。何が気に食わなかったのかしらんが、いきなり度数の高い酒を俺の目に浴びせ掛けるとは良い度胸じゃねえか……………」
どす黒いオーラを身にまとったカイは村長をジト目で睨みつけた。
「こ、これは事故じゃよ事故。そう睨むでないわい」

ビクツと怯えながら弁解する村長。顔が真っ青なのは咳き込んだだけではないようだ。

「それで……………3人死体になったとはどういうことなのじゃ？」
話をすり替え……………もとい、気になっていたことを聞く村長。

「ああ、その話な……………あんまり良い話じゃねえけどそれでも聞くか？」

言外に聞くなと遠まわしに伝えるカイ。そんなことは村長にとって知ったことではない。

「聞かせてくれるかの？」

バツサリと切り捨てた村長は話の続きを催促する。カイは溜息を吐いた。

「……………はあ。まったくアンタには色々な意味で適わないよ……………まあ、良い。それじゃ話すとしますかね……………死んじゃった3人の内、一人は実際にPTを組んだことがある奴でな。いきなり精霊に祝福されたとかって言い出した時は頭がイカれたのかと思っただが、本当に祝福されやがったらしくてな。それ以来、メキメキと実力を上げてAランクなんていう一流にまで登り詰めたが、とある依頼であっさりと死んじゃったよ。何でも目測を誤って、自分の魔術で自滅しちまったらしいな」

そう言ってカイはテキーラで唇を湿らせた。

「次に二人目だが、こいつも同じく俺と一緒にPTに組んだことがある奴でな。魔術師として研鑽を積むとかなんとかで自分の塔に引きこもって実験してたらしいんだが、ある日風の噂で塔が吹っ飛んだって聞いたな……………どうやら魔術を暴発させたらしい。骨すら残らなかつたと聞いたな」

「……………」

ガタガタ震えだす村長。それに気づかず続けるカイ。

「三人目は実際にはチラつとしか見たことねえんだが、ドレイク・ハンプトンとかっていう王都の警備隊長をしてた奴が居たんだが、精霊に祝福された途端に好き勝手やり始めて王都から追放されて盗賊に身をやつしたらしい。んで、ジェラ……………何とかっていう奴に捕まえられたドレイクは王都に戻ってすぐに処刑されたらしいぞ」

粗方三人の祝福を受けた者達の話聞いた村長は思った。ロクな人生を歩んでないと。

「どれもこれも洒落になつとらんじゃないか……………」

「まあ、確かに。でもそいつらに共通して言えることは『力に溺れた』ために死んじまつたってこつたな。たつた一人を除いてな」
そう締めくくったカイはクイッとテキーラを煽る。

重苦しい雰囲気包む中、村長はカイの言った最後の一言を聞いて一つ気になっていたことがあつたのを思い出した。

「その三人は死んでしまったというのは分かるが、もう一人……………生きておる者がおると聞いたが、そ奴の話をしてくれんかの」

すぐるようなウザイ村長の目を見て若干の吐き気を催しながらカイは語る。

「……………最後に生き残ってる四人目つてのは俺のオフクロでな。俺を生んだ後すぐに祝福されちゃったらしいが、今でも故郷で元気に生きてるだろつよ。」

50過ぎたババアのクセして、精霊の祝福だか何だか知らねーが20代にしか見えねえ見た目を保つてやがるんだよ……………ありゃ本物の化け物だな」

「なんと!!お主のお母上が祝福されたとはっ!!」

……………ところで、精霊の祝福を受けた他の3人とは何かが違うような物言いじゃが、どういう事なんじゃ?」

「ああ、その事が……………そんなの単純明快さ。」

オフクロは精霊の祝福ってやつがどんな類の物なのかを真に気づいていたから生き残れたんだよ。

使い方次第でどのように転ぶ諸刃の剣だっことを知っていたのさ。オフクロは力が暴走しないように、その力を使いこなすこと………つまり自らの力を完璧に制御することに全力を注いだのさ」

カイは再びキーラを煽った。

「ほう、力の制御が肝心なのだな？」

「その通り。」

つまり魔力を寸分変わらず完璧に操作出来るようにする事が重要なんだなこれが。それが出来なきゃ、毎日を魔力の暴発に怯えて暮らすことになる。

実際、他にも精霊の祝福を受けた者は王都で何人も居るが、その内の多くの者がふとした瞬間に魔力を暴発させて亡くなってからな………例えば夫婦喧嘩をしてる最中に魔力が暴発した、なんて何年かに一回は爺さんも聞いたことあるだろ？」

そういわれた村長は、そういえばそんなことも聞いたことがあるな！なんて他人事のように思っていた。しかしすぐに自分もそうなるかもしれない事に気づいた村長は顔面を蒼白にさせた。

「な、なるほどのう………と、と、と、と、と、と、と、と、とお主のお母上はどうやって魔力のコントロールを練習したんじゃ？とにかく教えてくれんかのう！！！！！！！！」

クワつと目を見開いた村長はカイの顔面目掛けて詰め寄る。

「ぬああっ！！！！なんだ、爺さん！！ビックリするじゃないか！！！！

………まあ、いい。教えてやるよ。

オフクロが話すには、毎日ありつただけの攻撃魔法を唱えまくって魔力の流れを掴んだとか言ってたぞ」

「へ？？？？？」

間の抜けたような面を晒す村長。

「いやいや、そんな顔されても実際にそう言われたんだよ俺は。フアイアーストームだのヴォルケーノだの（何故か炎系の魔法しか思いつかなかったそうだ）思いつく限りの魔法を毎日毎日村の外のモンスターどもに撃ちまくってたらいつの間にか制御できるようにな

つてたとかホザいてたな」

唾然とする村長を尻目に一人、ウンウンと頷いているカイ。

「まあ、普通じゃないとはいえ、毎日毎日練習していれば上手くなるのはどんな物にも共通して言えることだって話だな。そこで慢心したり油断したりすると痛い目に遭うし、コレに限っては力を持つてるだけで危ない代物だから、確率が低いとはいえ、ふとした瞬間に危険な目にあったりするかもしれない。要するに、どの道折り合いを付けなきゃならないなら使いこなせたほうが危なくないって話に帰結するわけさ……何か知らんが参考になったか？爺さんよ？」

少し放心していた村長は声を掛けられて八つとする。

「……………ぬおっ、ほ、ほう、なるほどのう。」

参考になったわい。ワシはちよつと今すぐ家に帰らなければならん用事を思い出したから、これでゆっくり飲んでるといいぞ！」

村長は懐から銀貨を出してカイのテーブルに置くと、ジョアンに自分の酒代を払って全速力で店から消えていった。

「……………なんだありや？気でも狂ったのか、あの爺」

ぼつりと呟いたジョアンの一言に、カイも同意しそつになったのはまた別の話である。

増える厄介事と日課

あの酒場の一件から帰ってすぐに妻のアンナから折檻を受けた後（村長の顔面が變形していたそうな）村長はこの村を往復する数少ない商人の一人であるマイルス（56歳 既婚者男性）に頼んで魔術書をしこたま仕入れて貰う事にした。（余談ではあるが本が家に届いた瞬間、無駄遣いをした罪状でアンナから再び折檻を受けることとなった。）

それと同時に、朝の掃除以外に村長の日課として魔力コントロールの練習が追加された。もちろん、練習風景は村人に見つからないように気をつけ、なるべく厄介ごとを引き寄せないように努力する村長。その涙ぐましい努力を村の発展に向けられないのが村長がダメ村長たるアイデンティティなのかもしれない。

「ふう……………またここに来てしまったわい」

村長は以前、魔法を使って環境破壊を行った村の外れに来ていた。なぜこの場所に来たかというと、今から魔術の練習をする為だ。

そしてよりによって何故この場所なのかというと、既に木々がなぎ倒された状態なので今更派手に魔法を撒き散らしても問題ないと判断したからである。

「さーて、始めるかの」

そう言うと村長は魔力を体の中で感じ取るように意識を集中し始める。

最初はただ漠然と魔法を放って練習していたが、商人が仕入れてきた魔術書の一冊に（タイトルは『バカでも分かる魔術の本 Vol.1』）まずは魔術を感じ取ることがコントロールの秘訣であると書かれており、魔術を感じ取る方法が書かれていた。

魔法の威力云々ではなく完全なコントロールを目指している村長にとっては渡りに舟の必須項目であった為、今ではメインの練習はズバリ魔力を感じ取ることになっていた。

「……………」
村長が意識し始めると、体の中からポワツと”力”が湧き出ているのを感じていた。その力は丁度、精霊王に光源の塊を体に入れられた箇所から湧き出ており、その無限とも思える膨大な力を身近に感じて村長は戦慄した。

当然の話ではあるが、魔力が大きくなれば大きくなるほど制御は難しくなってくるので、村長にとって難易度は最初からヘルモードである。

例えるなら自分の中にとてつもなく状態が”不安定な”燃料が入っており、急に動いただけで爆発四散してしまう可能性がある状態で暮らさなければならぬところから始まっているのだ。

ということはつまり、繊細な魔力コントロールが必要不可欠で、無理やり言う事を聞かせようと力技でねじ伏せようとすれば返り討ちに遭い爆発四散。かといって、まるで割れ物を扱うかのようにコントロールにあまり力をいれないようにすればいつ暴発するか分からない。それこそ使いこなすには尋常ではない程の”繊細”なコントロールが必要となってくる。

村長は知る由もないが、最低ランクで見積もってもコントロールする為には王都の宮廷魔術師並みの技量が必要なのである。

哀れ村長……………もとい、頑張れ村長。

「うがあああああああつ！！」

こんなもん制御なんて出来るかあああああつ！！！！！！
責任者出て来いっ！！クソオオオオオオオオつ！！！！」

半ばヤケクソで叫ぶも、返ってくるのはカラスの鳴き声ばかり。

誰も村長を助けてくれる者は居なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439s/>

村長無双！

2011年10月29日07時10分発行